December 2011 No.151

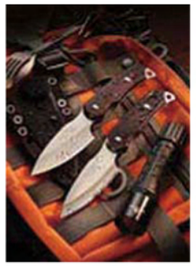
KNIFE

私たちはナイフへの理解を深め、正しい使い方を提案し、事件・事故の防止を推進します。

PUBLISHER: Kesaharu Imai
EDITOR IN CHIEF: Yasuhito Sakurai
SENIOR EDITOR: Natsuo Hattori
STAFF PHOTOGRAPHER: Naganori Tsutsumi / Yoshihisa Kumagai / Yasuji Yushina / Tomoaki Tsuruda / Takenori Aoki / Masakuni Miyasaka
COVER DESIGN: Kyosuke Suda (Mabuchi Design Office)
DESIGN: Mabuchi Design Office / Project Q / WPP Design Section
Correspondent, Washington, D.C. Bureau (Pictorial Press International) : Norman T. Hatch / Mikako Burks

©WORLD PHOTO PRESS 2011

東日本大震災の被災地、被災者の皆様に、心よりお見舞い申し上げます。
株式会社ワールドフォトプレス



CONTENTS

3 TOPICS ナイフの品格を感じさせるロングセラー
古川四郎作「ボウイナイフ」

【連続企画】
体の一部として刃物を使う

8 ワンランク上のアウトドアライフを楽しもう
キャンプでナイフアレンジ・ワークショップ!

16 はたらく刃物 特別編
大人の技術科

42 東京鍛冶の系譜 特別編
「削ろう会」レポート

48 Brian Fellhoelter
ブライアン・フェルホルター

73 カスタム・ナイフメイカー
大垣宗義

80 錆びない刃物鋼H-1をブレイド材にした
Gサカイ「サビナイフ」フィールドテスト・レポート
SABI KNIFE SERIES

84 今清水流「美似」の世界に魅了される
ミニチュア刃物コレクション

88 USN Gathering Usual Suspect Network Show
USNギャザリング・ナイフショウ

22 やっぱり鉄は旨い! ●菊池仁志
35 鍛冶屋フィールド・ワーク ●かつきせつこ
37 実践的道具考 ●星野欣也
38 大工道具のかたち ●上田昇／秋山実
56 TAKE FIVE! ●大東正巳
57 関アウトドアナイフショー ●尾上卓生
58 インフォメーション
62 パリナイフショー2011 ●岡安一男
64 USナイフ事情 ●ヒロ・ツガ
66 アメリカ文化とナイフ ●菊月俊之
68 ハンターとハンティングナイフ ●中條高明
70 ハンティング・パーフェクション ●中條高明
95 ニュープロダクツ／読者プレゼント
96 バックナンバー

●表紙撮影／長谷川朋之 ●表紙デザイン／須田恭介（マブチデザインオフィス）
●撮影作品／Gサカイ「サビナイフ1」 G Sakai "SABI-KNIFE 1"

*文中の価格は全て消費税込みの総額表記です。

【連続企画】

体の一部として刃物を使う

「手道具ってのはひとことで言うと『体』そのものだな」

今回、話を聞いた、ひとりの棟梁の言葉だ。

手で木を削ったり、穴を穿ったり、もしくは食べ物を切り分けたりできれば、道具は必要ない。だが、もちろんそんなことは出来ない。だから必要とされてきた、というわけだ。

手の代わりとなり作業を行う手道具は、だから、自らの体の一部である。そう棟梁は語る。

彼の言葉を待つまでもなく、職人は道具を大切に扱うし、上手かどうかも道具の扱い方を見ていれば大体分かる、ということもよく言われる。

多分その話は事実だろう。

電気という便利な「道具」を扱うようになった私たちが、手を扱わなくなって久しい。鉛筆削りをナイフで行わなくなり、一口大に切り分けられた食材を購入しながら、「手道具」をいつしか脇へ追いやり、その使い方を少しずつ忘れていった。そして、巨大な発電装置が致命的な事故を起こしたときに、なすすべもなく、立ち尽すほかなかったのである。

闇雲に原始生活に戻るのがいいとは思わない。

しかし、私たちは、自らの手ができることをもう一度見つめ直し、「身の丈」にあった生活を考える時期に来ているのかもしれない。

その時に、一本のナイフ、ひとつの手道具が、果たす役割が改めて見えてくるはずだ。

そもそも手道具が体なのであったら、大事にせざるを得ないじゃないか。

道具として刃物を楽しむ、というテーマで、今回は、初級者から中級者向きのノウハウ&アイデアと、上級者たちの道具使いの実際などを広く紹介しました。どうぞご覧ください。

（編集部H）

⇦記事はＰ８～／Ｐ16～／Ｐ42～をご覧下さい。

写真：三原久明

ワンランク上のアウトドアライフを楽しもう

キャンプでナイフアレンジワークショップ！

文・写真：長谷川朋之
TEXT・PHOTOS:Tomoyuki Hasegawa

アウトドアで男達による意外なワークショップが開催された。「包丁禁止」をモットーにするアウトドアグループのキャンプにカスタム・ナイフメイカーが合流。キャンプでナイフを使いながら、カスタムでアレンジを施すという新たな楽しみを模索！

福田正孝作
「4インチ ドロップハンター」
Masataka Fukuda
"4 inch Drop Hunter"

全長217㎜、ブレイド長101㎜、鋼材ATS-34、ハンドル材スタッグホーン。価格　万円。

フェイカーズ主宰の和田勉氏のオーダー。JKGの記念モデルとしてボブ・ラブレスが13本製作した"ドロップハンター"をモチーフにしたオマージュナイフ。名作を素晴らしいスタッグハンドルで製作。

キャンプでカスタムナイフを実用する！

「傷でも付いたらどうするんですか！　心配で使えませんよ」

「カスタムナイフを使いましょう」と言うと、九分九厘似たような返答が返ってくる。確かに高価な品物がキズ付いてしまうのは辛いもの。しかし、せっかく入手したナイフを使わないで、大切に仕舞い込んでるのは、もっと大きな損失ではないだろうか。

キャンプ場にメンバーが続々集結。揃ったところで、オーダーしていたナイフ作品とご対面。

さっそく使う！　ダッチオーブンにエッジを当てないよう注意。不必要に切れ味が鈍る事は避ける。

もし今、事故などで死んでしまったならば、引き出しのコレクションをあの世に持って行く事はできず、俗世に還ってしまう。知り合いの好きな人に使ってもらえればまだよいが、価値が理解してもらえなければただのモノ。他の多くの遺品と一緒に処分されるのはあまりに寂しすぎる。

コレクションが好きな方もいるだろうが、カスタムナイフは実用を目的にデザインされている。元気なうちに使ってこそ華！　使わなければ見えてこない魅力が隠されているのである。

包丁禁止！"フェイカーズ"キャンプ

というわけで、この度もアウトドアグループ"フェイカーズ"が主催するキャンプにお邪魔した。

フェイカーズとは和田勉さんを中心に、仲間16人で構成されるキャンプグループ。「包丁使用禁止」という掟が定められている。家庭で使っている包丁を使わない事で、いつもの生活から離れる事を目的にしている（2010年10月号参照）。

とはいえ、判っていてもやっぱり使うことにどうしても躊躇してしまう。その理由を訊ねると……。

「切れ味が鈍るのではないか」

「傷ついてしまうのが怖い」

というのが主な理由のようだ。

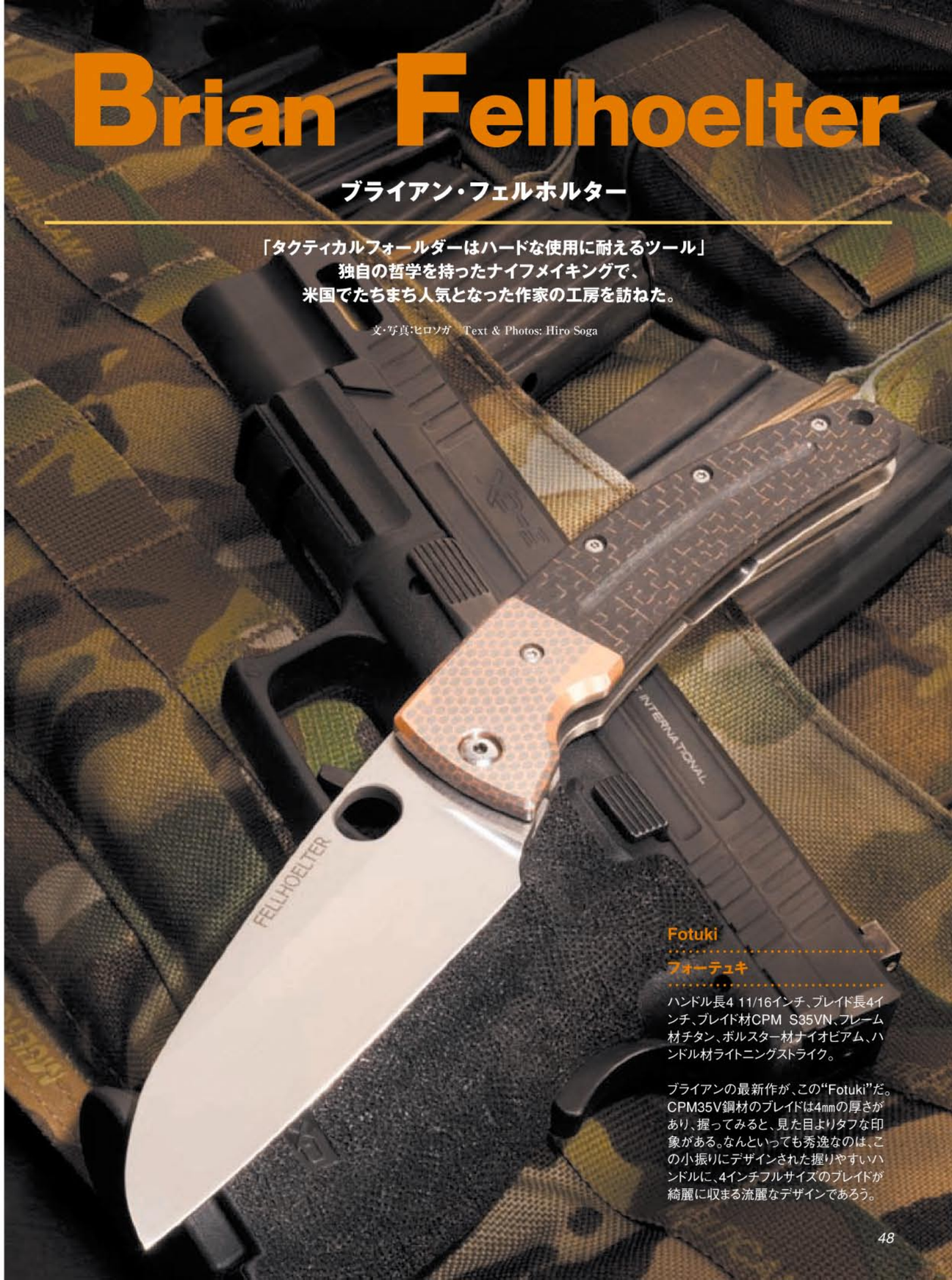
切れ味が鈍れば研げばよい。さらに、ナイフは落としたりしなければ、そうそう簡単に傷つくものではない。逆に使い込んだものはブレイド

Brian Fellhoelter

ブライアン・フェルホルター

**「タクティカルフォールダーはハードな使用に耐えるツール」
独自の哲学を持ったナイフメイキングで、
米国でたちまち人気となった作家の工房を訪ねた。**

文・写真:ヒロソガ　Text & Photos: Hiro Soga



Fotuki
フォーテュキ

ハンドル長4 11/16インチ、ブレイド長4インチ、ブレイド材CPM S35VN、フレーム材チタン、ボルスター材ナイオビアム、ハンドル材ライトニングストライク。

ブライアンの最新作が、この"Fotuki"だ。CPM35V鋼材のブレイドは4㎜の厚さがあり、握ってみると、見た目よりタフな印象がある。なんといっても秀逸なのは、この小振りにデザインされた握りやすいハンドルに、4インチフルサイズのブレイドが綺麗に収まる流麗なデザインであろう。

ニューブリード ナイフメイカー

「タクティカルフォールダーは、ウェポンだと思っている人が多いが、私は堅牢なユーティリティツールだと考えている。だから、優れた切れ味も必要だし、何よりも使い易さが重要だと思う」

と言い切るのが、昨今人気急上昇中のカスタムメイカー、ブライアン・フェルホルターである。

今年のブレイドショウでは、R・J・マーティン、ケン・オニオン、バット・クロウフォードといった強豪を下して、"ベストタクティカルフォールダー"賞を勝ち取った。本物である。

実のところ、私自身も彼の作品には2006年のナイフエクスポで出会って以来、毎年新作を楽しみにしていたという背景もある。当時のブライアンは、ナイフを作り始めてまだ1年目にもかかわらず、カーボンファイバーやチタンを駆使したフォールダーで注目を集めており、すでに相当数のオーダーを抱えていると聞いて納得してしまった覚えがある。

あれから5年、今やブライアンは中堅を通り越して人気メイカーの仲間入りをしているといっていいだろう。

ウォーレン・トーマスやティンバーランド社とのコラボレーション、トリプルオート社やトゥルーノースナイフといったメジャーディーラーからのエクスクルーシヴ(特別)モデル発表など、話題には事欠かない注目株なのだ。

今回やっとこさ念願のショップ訪問をする事ができた。彼とは、ナイフショウで会うたびに新作を見せてもらう間柄になっていた。何せ毎回何か新しい発見があり、話を聞けば聞くほど彼のナイフメイキングを見てみたいと思っていたのだ。

彼の経歴というのが、波乱に満ち溢れていて興味深い。

まず、18歳でミリタリーに入るべく、アーミーに志願したが、身体検査で落とされてしまう。

「聴覚が基準に達していないというんだ。それまでそんなこと言われたことなかったからね。落胆したなあ。

で、偶然見かけたチラシに載っていた職業訓練校に行く事にした。父親がツールメイカーだった

何とも優雅なラインを見せるCPM S35VNブレイド。刃持ちの良さで評価が高い鋼材だ。

ハンドル裏面はシンプルなチタンフレームロックだ。ポケットクリップは、ハンドルがポケット内に深く落ち着くよう工夫されている。

美しく収まる4インチフルサイズブレイド。手仕上げのヘアラインが優美に映える。

サビ・ナイフ・シリーズの新製品“ワンセレ”は、ブレイドの付け根に1か所だけ波刃が付けられている。魚を捌く時には長めのストレート・エッジが必要だが、釣り糸を切る波刃も欲しい。そんなユーザーからの要望に応えたエッジ・デザインだ。サビナイフ1から3まで、3種類のサイズで作られている。

SABI-KNIFE 2

■サビナイフー2　上
（サバキ3寸包丁）

■サビナイフー2 ワンセレ
（サバキ3寸包丁）　中

●以上2点とも：全長190㎜、ブレイド長92㎜、ブレイド厚2㎜、重量100g（ナイフ本体のみ）、ブレイド材H-1鋼（HRC56～57）、ハンドル材黒檀、価格7,140円。
小型から中型の魚を主な対象にした中サイズ・モデル。ワンセレはブレイドに波刃をひとつ設けたバリエーション。釣り糸などを切る時などに便利なブレイド・デザインだ。

■サビナイフー3　下
（サバキ4寸5分包丁）

大型の魚や動物の解体、調理までをカバーする大型モデル。家庭用の包丁としても使いやすいデザインとサイズだ。サビナイフ2、3のポイント部分には、バック側を削り落とした鎬があって刺さりやすい。魚を処理する時に、この機能が重要な役割を果たす。スペックはP83に。

SABI-KNIFE 4

■サビナイフー4「出刃鯱」

●全長298㎜、ブレイド長170㎜、ブレイド材H-1鋼（HRC56～57）、ハンドル材プラスチック、ブレイド厚4㎜、重量245g（ナイフ本体のみ）、価格13,650円。
木村さんのフィールドテストからのレスポンスも参考にして作られたモデル。

4000年に及ぶ金属製刃物の歴史を考えれば、それは当然のことだ。

あれから数年、スパイダルコのH-1モデルは着実に実績を伸ばし、「錆びない刃物鋼H-1」の評価もすっかり定着した。Gサカイでも、オリジナル・ブランドのナイフに“SABI KNIFE”を追加して、フィッシング、ハンティング用のモデルをいくつもリリースしている。

H-1の特徴は、錆びないことの他にもある。熱処理をしなくても、刃物として充分な硬度を得られるという特徴だ。おそらく、研削や研磨の工程で発生する摩擦熱が、素材を硬化させるのだろう。仕上がり硬度はHRC56から57に達する。シャープな切れ味と研ぎ直しやすさを兼ね備えた実用ナイフ向きの硬度だ。熱処理工程を簡単に済ませることで、価格も抑えられる。リーズナブルな価格で提供できることも、実用ナイフの大きなメリットだ。

今回は、Gサカイへの投稿をきっかけに、試作品のテスターやアドバイザーを務めるようになったという木村 力（つとむ）さんに、H-1ナイフについてのお話しを伺ってみた。釣り、ハンティングを趣味とする木村さんは、「プレミアム付きのナイフでも、買う場合は使うことが前提」だというナイフのヘビー・ユーザー。これまで、有名ブランドのナイフを数多く使ってきたが、H-1ナイフとの出会いは衝撃的でさえあったという。

●

SABI-KNIFE 7

■サビナイフー7「逆叉」

●全長265㎜、ブレイド長135㎜、ハンドル材ザイテル、ブレイド厚4㎜、重量197g（ナイフ本体のみ）、ブレイド材H-1鋼（HRC56～58）価格11550円。
シリーズ最新作として10月から発売されたモデル。

錆びない刃物鋼H-1を
ブレイド材にした

Gサカイ「サビナイフ」フィールドテストレポート

SABI KNIFE SERIES

●文：圷正史／写真：［ナイフ］長谷川朋之・［フィールド］木村力
●商品問合せ：Gサカイ☎0575-29-0311 http://www.gsakai.co.jp/
Text：Masashi Akutsu/Photos：Tomo Hasegawa, Tsutomu Kimura

錆びを克服した夢の刃物鋼

岐阜県関市に本社を構えるGサカイは、マスプロ・ナイフのトップ・ファクトリー。海外ブランドのナイフも多く手掛け、ナイフの本場アメリカでも一目置かれる存在だ。

そんなGサカイが、錆びに強いステンレス鋼を目指して研究をつづけた結果、誕生したのが“H-1”鋼。極めて錆びにくいこの鋼材はアメリカで注目を集め、スパイダルコが採用して知名度を上げた。

「錆びない」という表現をうのみにして良いものなのか……。金属製の刃物は錆びるのが当たり前という長年の常識から、当初はH-1の特性判断に慎重なユーザーが多かった。

木村力（きむらつとむ）

昭和34年生まれ。狩猟と釣りを主な趣味とし、ナイフ歴30年に及ぶベテラン・ユーザー。数年前からダッチオーブン・クッキングを始め、現在は10個以上を駆使してアウトドア・クッキングを楽しんでいる。アウトドア・スポーツがライフ・スタイルそのものだという。数年前にGサカイのホームページに投稿したのをきっかけに、H-1ナイフと出会い、現在は試作モデルのテスター、ニューモデル開発のアドバイザーを務めている。